

16 自己点検・評価等

【目的・目標】

自己点検・評価は自主的な努力により「本学の教育、研究における質的向上を図る」ことを目的とする。各部署で自己点検・評価を行い、報告書の作成と、次の報告書作成までの間で全学報告会を開催する。これによって、自己点検・評価活動を効果的に行い、速やかに実行することを目指す。また、学外者によって、自己点検・評価の客観性、妥当性を検証し、自己点検・評価の質的向上を図る。

16-1 自己点検・評価

【現状の説明】

1994年芸術学部の発足とともに、自己点検・評価活動を開始した。1999年度の芸術学部の完成を待って、大学基準協会維持会員加盟を申請することになり、1998年/1999年度の自己点検・評価報告書を1999年5月にまとめ、全学報告会を開催した。以後、隔年に自己点検・評価報告書の作成と全学報告会を開催することを目安とした。2006年度は大学基準協会の認証評価を受審するため単年度の報告書とした。本報告書は2007年/2008年度の2年間分をまとめたものである。

学部と大学院の記載に関しては、学部と大学院を合併した形としている。報告書の書式は（財）大学基準協会発行の大学評価マニュアルに従って目次立てを構成し、記述した。

【点検・評価】【長所と問題点】

本学では15年以上に渡って自己点検・評価を実施してきており、毎回の自己点検・評価において改善策とその実現状況を点検してきた。

その結果、例えば、工学部と芸術学部を持つという本学の特徴をよりはっきり打ち出すために、2003年度から工学部と芸術学部の共同研究を推進するための組織作りと研究助成が開始された。2004年度は2件、2005年度は3件、2006年度は1件が採択され、研究助成が行われるなどの効果を挙げたが、2007年度は応募がなく、2008年度には制度見直しのため実施を見送ることとした。

さらに、自己点検・評価報告書の作成と全学報告会の開催を隔年で実施しており、自己点検・評価活動がより効果的に行われる仕組みをとっている。

16-2 自己点検・評価と改善・改革システムの連結

【現状の説明】

自己点検・評価報告書を作成し、全学報告会を開催することにより、改善、改革を着実に実施するシステムを構築した。2006年6月の全学報告会は66名が参加し、本学の自己点検・評価について学外の有識者から講評を受けた。客観的な評価を受けることで、より一層の改善に努めている。

【点検・評価】【長所と問題点】

(1) 自己点検・評価報告書の保管

改善・改革を確実に進めていくために、2004年度から自己点検・評価報告書を厚木キャンパス庶務課に一元保管している。これにより、自己点検・評価報告書が長く庶務課に保管され、記録の散逸を防ぐことができるようになったとともに、改善・改革の状況を常に把握できるようになった。

(2) 東京工芸大学自己点検・評価規程の整備

自己点検評価活動の開始時は、自己点検・評価委員会は学部ごとに設置されたため、大学全体の規程は整備されなかった。自己点検・評価は学部単位ではなく、大学全体で実施する必要があることから、法人を含めた大学全体で自己点検・評価を行うために、2005年11月に各学部の自己点検・評価規程が改廃され、学校法人東京工芸大学自己点検・評価規程が整備された。

この規程に基づき、理事長を委員長とする学校法人東京工芸大学評価委員会が設置され、下部組織として新たに東京工芸大学自己点検・評価委員会が設置されることとなり、継続的かつ全学的に自己点検・評価活動を行い、教育研究の質の向上に努めている。

(3) 改善計画の実施

2006年6月に自己点検・評価の全学報告会と報告書に関する「学外者からの講評」を受けた。講評での指摘事項は、次回の自己点検・評価報告書の作成に反映されるよう記録し、改善・改革が的確に実施できるようにした。

16-3 自己点検・評価に対する学外者による検証

【現状の説明】

1994年に自己点検・評価活動を開始して以来、適宜、自己点検・評価報告書全学報告会を開催するとともに、学外有識者による講評を得るよう努めている。最近では、2006年6月に全学報告会を開催し、工学系・芸術系からそれぞれ1名の有識者を招聘し、講評を得た。

【点検・評価】【長所と問題点】

2～3年度分まとめて自己点検・評価報告書を作成し、全学報告会を開催する方法は、継続的に自己点検・評価活動をしていく上で効果がある。また、学外有識者の評価を得ることで、自己点検・評価の客観性、妥当性を確認することができ、これを踏まえて改善、

改革していくことは有意義なことであり、今後も継続すべきと考える。

【自己点検・評価等に関する将来の改善・改革に向けた方策】

(1) 自己点検・評価の継続

大学間の厳しい競争の中で、本学が個性輝く大学として生き残り、社会的な評価を高め、いくことが肝要である。理事長を委員長とする学校法人東京工芸大学評価委員会が中核となり、関係部署と連携を諮り、着実に改善・改革を推進する。

(2) 外部者による自己点検・評価の検証

自己点検・評価においては内部からだけではなく、その客観性・妥当性を確保するために外部評価も極めて重要であり、これまでも継続的に行っている。2009年度には全学報告会を開催し、学外有識者の評価を受ける予定である。

(3) 勧告・助言に対する改善実施

大学基準協会による勧告として1項目、問題点の指摘に関する助言として12項目の改善報告を求められたが、これらの勧告・助言を真摯に受け止め、積極的かつ計画的に改善を続けている。今後とも、指摘事項の是正や改善に努める。

(4) 勧告・助言に対する今後の方針

大学基準協会による今後の方針として、評価とは「されるもの」ではなく、自らの意思で「行うもの」であるという意識の定着化が求められている。この結果として、自己点検・評価体制の再構築について早急に検討が必要である。